Kintetsu
近鉄アート館

北原亞以子
夜鷹蕎麦十六文
思案橋の二人
佐江衆一

日時／2016年
9月25日(日)
昼／13:00開演(12:30開場)
夜／17:00開演(16:30開場)

会場／
近鉄アート館
あべのハルカス
近鉄本店ウイング館8階

朗読劇団
朗読GEN第14回定期公演／大阪市助成公演

―予 告―

～奈良・学園前楽しい朗読教室
第4回発表会～

11月20日(日)14時～(15時半位に終了予定)

■ 於 ：ギャラリーGM-1（無料）
（近鉄学園前南口より徒歩5分）

■演目：藤沢周平「踊る手」
NHKアナウンサーとして活躍された松平定知さんが藤沢作品の虜になった作品。最も印象的な作品はと問われたらこれが頭に浮かぶと‥‥温もりのあるラストシーンをぜひお聞きください。

重松 清「ネコはコタツで」
やさしくて、しみじみと人の温かさに救われる、重松清の小説、泣いて、笑って‥‥

※小さなギャラリーですので、できる限り事前にご予約ください。
――お問い合わせ、ご予約は下記 秋山まで――

■朗読GEN稽古場案内

場所：ムーブファクトリー
大阪市北区中崎町
（JR天満駅より徒歩10分・地下鉄中崎町駅より徒歩3分）
毎週水曜日18時半から21時、見学随時受付けしますが、まずはお問い合わせください。

■朗読教室ご案内

～奈良学園前・楽しい朗読教室～

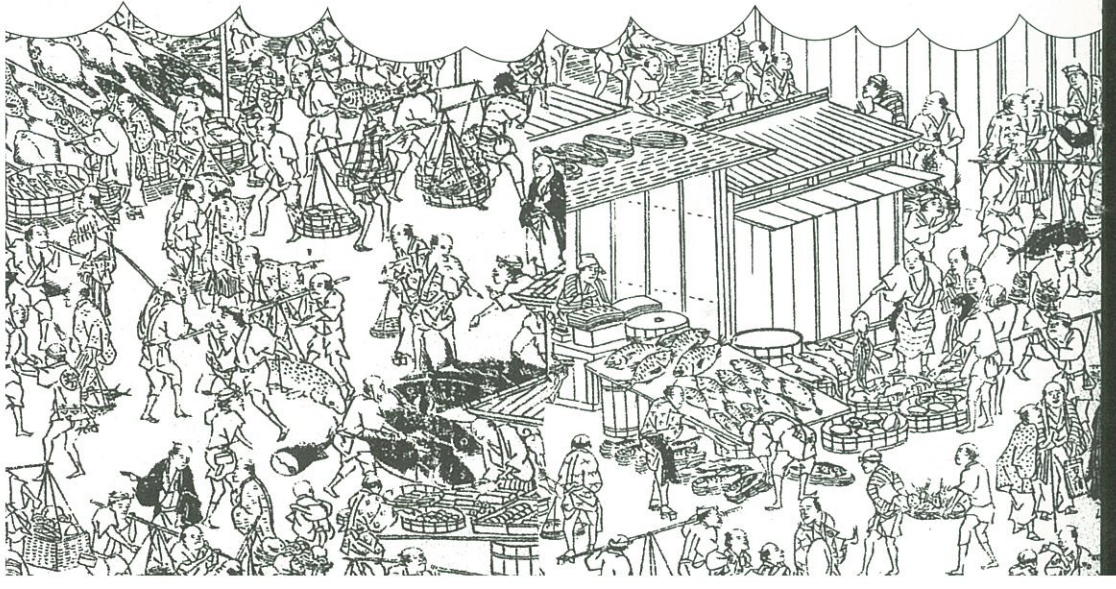
初心者のためのレッスン。経験者もまた改めて学んでみようと思う方もぜひお気軽にお越しください。その方に応じてクラスを選んでいただけます。
第2、4（火）10時～・11時半～。
無料体験、教室見学あり。まずはお問い合わせください。
【サンライト文化教室】で検索可。

■お問い合わせは
TEL&FAX／0742-48-8688(秋山)
メール／akikan@m4.kcn.ne.jp
またはホームページ／http://r-gen.jimdo.com
（朗読GENで検索できます）

ごあいさつ

本日はご来場まことにありがとうございます。
今年もたくさんのお客様に支えられ、良きスタッフに恵まれて、今日を迎えることができました。心より感謝申し上げます。
今回は江戸時代を愛する二人の作家の作品を取り上げました。両作家とも江戸の匂いが残る土地に生まれ、北原亞以子は名人気質の椅子職人の祖父と歌舞伎好きの祖母の影響を受けて育ち、佐江衆一は実家の質屋の周りに職人が多く住む環境で職人の生き方や、心意気に触れて育って「職人の生き方が肌にしみついている」と書いています。また前歴がコピーライターという共通点もあってびっくりしました。
ずっと大好きで取り上げたかった「夜鷹蕎麦十六文」に登場する落語家の所作指導を上方落語界の若手実力者、桂吉坊氏にお願いしました。また「思案橋の二人」では浦田克昭氏に殺陣の振り付け・指導をして頂きました。その難しさに四苦八苦しながらも、お二人の熱心なご指導のおかげで、少し雰囲気を出せるようになったのではないかと・・・
お二人には改めて感謝申し上げます。
少しでも小説の世界を皆さまに感じて頂けたらいいなと、活動を続けてまいりましたが、その思いが届けられるよう、本日も精一杯努めます。
どうか最後までお楽しみいただけますように。

演出　秋山　太加



原作／北原亞以子

上演台本
演　出　秋山太加

「夜鷹蕎麦十六文」

■キャスト

かん生	福嶋左知子
おちか	秋山太加
志ん生、大家	田中章恵
染八	村井友美
番頭、下足番	坂田昌子
水鏡、おかつ	宮路一枝

原作／佐江衆一

上演台本
演　出　秋山太加

「思案橋の二人」

■キャスト

土屋半兵衛	田中章恵
長坂六右衛門	太田淑子
半兵衛の妻千代	秋山太加
太吉	福嶋左知子
山東京伝	宮路一枝
お菊 蔦屋重三郎	村井友美
曲亭馬琴 春木屋	坂田昌子

■スタッフ

音響	西角秀紀（㈲ムーブファクトリー）
照明	牟田耕一郎（劇団ママコア）
舞台監督	佐野泰宏
「夜鷹蕎麦十六文」落語・所作指導	桂吉坊
殺陣振付	浦田克昭
ヘア・メイク	五十嵐公子（日本メークアップアーチスト学院）
着付け	奥山みどり
衣裳製作	青柳秀子
ヘア・メイク	井上三友紀 藤原美弥 西口礼香
宣伝デザイン	桂瑞子
記録	NOG
制作	丹原祐子（Office P・T企画）
音楽選曲	秋山太加
協力	田中仁美 田中湧也 桝田聖美 いちきめいこ 堀川希絵
稽古場協力	㈲ムーブファクトリー
パンフレット	
デザイン	桂瑞子
編集・文	秋山太加
印刷	宣光社
企画・製作	朗読劇団・朗読GEN

■プロフィール

桂　吉坊（落語家）

1981年兵庫県西宮市生まれ。
99年に桂吉朝に入門。同年岡町落語ランドにおいて「東の旅～煮売屋」で初舞台。
2000年4月より桂米朝のもとで内弟子修行、03年4月に内弟子を卒業。以後、古典落語を中心に出演。
07年にはG2プロデュースの舞台「地獄八景浮世百景」で役者デビュー。08年公開の映画「能登の花ヨメ」で謎の旅人として映画デビュー。今後の上方落語をになっていく存在として各方面から期待されている。
2011年　咲くやこの花賞を大衆芸能部門で受賞。
2014年　第9回繁昌亭大賞奨励賞。
2016年　国立演芸場花形演芸大賞銀賞。

【今後の予定】
11. 2／吉坊・一之輔二人会（繁昌亭）
11.16／瓦林寄席（西宮、極楽寺）
12. 3／上方文化再生フォーラム（千日前トリイホール）
12.13／吉坊ノ会（近鉄アート館）

■客演プロフィール

坂田昌子

おしゃべり集団「チームソラミミ」のメンバー。インターネットでの朗読を中心に、朗読ライブやラジオ出演、ボイスドラマなど、活動の幅を拡大中。
現在FMたんご「ワンテーマミュージック」（毎週水曜日14時～）にてナレーションを担当している。

宮路一枝

大阪で活動している演劇ユニット『カラ／フル』所属。
表現することの難しさ、伝えることの大切さ、気持ちを込める楽しさ、全部ひっくるめて舞台大好き人間。
イベントMCとしても活動中。

村井友美

演じることによって、人の心に残る存在になりたいと芝居を始める。
約10年間 劇団に所属の後、現在フリーで活動中。
2016年2月 劇団彗星マジックの公演に客演として出演し、主役の少年を演じた。

夜鷹蕎麦十六文

講談社文庫「その夜の雪」所収

北原亞以子

落語のはじまり

落語という言葉

江戸時代には落語という言葉は使われておらず、「咄」または「噺」と言われていた。
関西では「軽口咄」、江戸では「落とし咄」と呼ぶことが多かった。江戸末期には短めの噺を「落とし咄」、長めの噺を「落語」と言った。
「落語」という言葉が一般的になったのは安政（1854～）頃から。その後、明治20年頃から更によく使われ始め、昭和になって普及した。

落語のルーツ

戦国時代の御伽衆が現在の落語家のルーツといわれ、江戸初期には、御伽衆の話をまとめた「醒酔笑」や「きのうはけふのものがたり」が出版された。その中には今の落語の題材が多くある。

- 醒酔笑‥‥秀吉などの武将に仕えた御伽衆、安楽庵策伝が元和9年に京都所司代の御前で話したものを筆録したもの
- きのうはけふのものがたり‥‥寛永13年、京都在住の御伽衆による笑話本

落語を仕事にした人たち

江戸時代が始まって80年位経った頃、京都に露の五郎兵衛（つゆのごろべえ）、大坂に米沢彦八（よねざわひこはち）、江戸に鹿野武左衛門（しかのぶざえもん）と言った人たちが現れる。もっぱら寺社の境内など人がたくさん集まる街頭に、葭簀（よしず）などで簡単に作った小屋で咄をしていた。

【十六文は今ならいくら?】

「文」が使われた時代は260年もあり、一両の価値も幕末には2分の1に落ちていた。一文も16～30円と諸説あり変動している。寄席の木戸銭は土間席なら100文、立ち見が

1700年代半ば、庶民文化が盛んになるにつれて、大坂で「素人の咄の会」が出来、身振りや手振りを伴う形が始まる。江戸では天明期（1781～）狂歌で名を知られた烏亭焉馬（うてい・えんば）が主催する「咄の会」が始まり、当時の文化人、のちの職業咄家も集まり新作の落とし咄が生み出されていく。烏亭焉馬は後年、落語界の中興の祖と言われた。

現在の大阪生國魂神社では今年も米沢彦八に因んで上方落語家総出の彦八まつりが開かれた。

寄席の移りかわり

関西では「講釈場」「席屋」「席」、江戸では「寄せ場」「寄せ」と呼ばれていたのが「寄席」となったのは1800年代初。大坂から江戸に下った岡本万作が興行をしたのが寄席の始まりとされる。その7年後神田で「頓作軽口噺」と銘打った興行が行われる。江戸の庶民文化が勢いを増すにつれて、寄席に元櫛職人の山生亭花楽（さんしょうていからく・のちの三笑亭可楽）、また人情話の名人として有名になった朝寝坊夢羅久（あさねぼう・むらく）、歌舞伎の木戸芸人から転身して芝居話で人気の出た三遊亭圓生（さんゆうてい・えんしょう）、怪談話の第一人者となった林家正蔵（はやしや・しょうぞう）らが登場する。

寄席や話の形が整っていくと同時に「前座～二つ目～中入り前～中入り後～膝代わり～真打ち」が順に登場するというスタイルや身分制度も出来ていった。

天保の改革による弾圧

天保12年（1848）、老中首座についた水野忠邦は徹底的に庶民の奢侈について弾圧を始めた。寄席に対する規制もすさまじく200軒あまりあった寄席は75軒に減り、翌年にはお触れも出て、市中15軒、寺社9軒になってしまった。

寄席の主宰者は様々な咎めを受け、大人気だった女義太夫は306人が逮捕され、三味線は没収、燃やされる。

しかし、水野は失脚。1844年から寄席の数は増え始め、幕末には一時300軒を超えるまでになり、明治期には80軒位が常時活動するようになる。

庶民に愛され育まれてきた、落語を中心とする寄席の芸能は、江戸から今に脈々と人々の娯楽として続いている。

あらすじ

売れない落語家かん生は粋が身上だが、女房おちかは田舎育ちで野暮を絵に描いたような女。深川芸者に貢がせる亭主をおいて、おちかは茶飯屋に働きに出るが‥‥

■御伽衆

豊臣秀吉は御伽衆を800人も抱えていたと言われる。政治や軍事の相談役になり、諸国の動静を伝えたりしていた。
しかし、政情がやや安定してきた頃は主君の話し相手としての役目が多くなる。読み書きが苦手な秀吉は耳学問として彼らを重宝した。
足利義昭、細川昭元、古田織部、千利休など多士済々。その中の一人と伝わる曾呂利新左衛門は今でいう落語家のような人物でまことに話し上手、秀吉によばれた家康がその話を聞いて思わず吹き出したという逸話も伝わる。

初代 古今亭志ん生

1809～1857

江戸の落語家。師匠は初代三遊亭圓生。人情話を得意とし、その上手さは誰も真似が出来なかった。得意の演目には「お富与三郎」「小猿七之助」などがあり、いずれも劇化され、8代目市川團十郎が演じ評判になった。

片足が不自由で籠に乗って寄席通いをしたと伝わっている。

作者が原作の最後に補足として「初代志ん生は安政3年に他界していますが、他の噺家ではどうしても筆が進まず、あえて志ん生を甦らせました」と書いている。

深川芸者

別名、辰巳芸者。江戸の深川（東京都江東区）で活躍した芸者のこと。深川八幡宮、永代寺の門前町は岡場所であり、「意気」と「張り」を看板にした芸者が評判になる。深川が江戸の辰巳（東南）の方角にあったため、「辰巳芸者」と呼ばれ、羽織姿が特徴的なことから「羽織芸者」とも呼ばれ、江戸の「粋」の象徴とされ、人気を博した。

北原亞以子（1938～2013）

東京新橋の家具職人の家に生まれる。

1969年『ママは知らなかったのよ』が第1回新潮新人賞を受賞。同年、『粉雪舞う』が司馬遼太郎に賞され、第12回小説新人賞佳作を受賞。しかし、その後は全く評価されず、40歳でコピーライターとして広告制作会社に入社。1989年『深川澪通り木戸番小屋』が泉鏡花文学賞受賞、出世作となる。

1993年『恋忘れ草』で直木賞。ありふれた何気ない市井の一場面がさらりと描かれているのに、江戸の空気や人々の姿が生き生きと感じられるのは、育った町を愛した著者の感性がみずみずしく張り廻らされているからだと思う。

佐江衆一

思案橋の二人

新潮文庫「江戸職人奇譚」所収

江戸の戯作者たち

余技から生まれた戯作

戯作は文字通り戯れに書くもので、武士や知識人が余技で書き始めたものである。決められた身分制度や、規制の中で鬱々とした思いを抱えた庶民は世相やご政道を面白おかしく洒落のめした戯作を読んで大いに溜飲を下げたのである。

戯作の中心にあった洒落本(注1)には江戸っ子の美意識が大いに伺われる。「通」であることがもてはやされ、半可通や野暮は馬鹿にされた。

版元は今でいうプロデューサー

戯作が生まれる前は、草双紙(注2)が大衆に好まれた。それを企画、制作、販売したのが地本問屋と呼ばれる版元である。版元は広告の仕掛け人の大元締めであり、その第一人者が蔦屋重三郎(1750～1797)であった。吉原の生まれと言われており、23歳で吉原大門のそばに書店をかまえ『吉原細見』(注3)の小売りを始めた。33歳で日本橋に進出。狂歌の会を主宰し、その人脈を生かし、浮世絵師の喜多川歌麿も世に出した。また「耕書堂」という出版社を、才能のある戯作者たちが出入りできる場とし、成功への道をつくった。

人気の戯作者

山東京伝 (1761～1816)

深川木場の質屋の長男、15歳で浮世絵師に入門、北尾政演(まさのぶ)を名乗り、18歳で役者絵の画集を蔦屋から出版、黄表紙も書き始める。1785年の『江戸生艶気樺焼』は大人気となる。寛政の改革で黄表紙界のスター、恋川春町が謎の急死をとげたこともあり、吉原の新造、菊園と所帯を持つとともに京橋に京伝店を開店して安定した暮らしをめざす。
京伝デザインの紙製たばこ入れは大ヒットしてあこがれのブランド品となった。

曲亭馬琴 (1767～1848)

『南総里見八犬伝』が有名。これを原作にした舞台が今も人気である。馬琴は28年かけてこの作品に取り組んだ。旗本の用人の息子として生まれ、元服後俳諧に親しみ、馬琴を名乗る。武家に奉公するが、長続きせず、無頼な生活を送る。24歳の時、京伝に弟子入りを願うが叶わず、食客となる。『椿説弓張月』で一躍名声を得る。

注1) 洒落本…天明期に流行した、遊里を舞台に対話で話がすすむ物語。

注2) 草双紙…戯作が生まれる下地になった。始まりは『桃太郎』『舌切雀』などの昔話を中心とした子ども向けの絵本で、表紙の色から赤本と呼ばれた。色恋や遊里を扱った青い表紙の青本が登場して、大人向けの読み物になる。1775年、恋川春町が黄色の表紙の『金々先生栄華夢』を出すと、知識階級の大人も満足する作品として人気が出た。以後「黄表紙」と呼ばれ、多くの人気作家を輩出した。山東京伝もその一人である。

注3) 吉原細見…吉原の情報誌。妓楼や遊女の名前、揚げ代金などが掲載されている。

寛政の改革による弾圧

(1787～1793)

天明3年(1783)、浅間山が噴火、東北地方を中心に天明の大飢饉がおこり政情が不安定になった。老中松平定信は寛政の改革を実施1790年出版に対する取締令も出て言論への弾圧がますます厳しくなった。好色本禁止令にひっかかり蔦屋重三郎は財産半分没収、山東京伝は手鎖50日の刑に処された。諷刺的な黄表紙を書いていた戯作者たち、版元は大打撃を受ける。

引札(ひきふだ)

江戸から大正にかけて宣伝のためにつくられた広告ちらしを引札という。

引札のはじまり

1683年ごろ呉服屋の越後屋が「現金安売り掛け値なし」という文を配ったのが始まりと言われている。年に2回まとめて払う掛け値売りが普通だったが、それを現金取引正札売りにしたのが大いに当たった。

引札の文案作者第一号は、奇才・平賀源内

1769年、平賀源内が、えびすや兵助から依頼され、歯磨粉の引札を書いた。これが評判となって、源内は他の引札も書くようになる。寒暖計、エレキテルなど様々な発明だけなく、本草学者、戯作者など多彩な顔をもつ源内は、風来山人のペンネームでコピーライターの草分けのような仕事をし、「土用丑の日は鰻の日」も源内の作という説もある。

引札師

1800年代初、食べ物屋、料亭が増え、商品も流通し、寺子屋が普及、読み書きできる庶民が増えて、宣伝が効果をあげるようになり、有名な戯作者に引札を頼むという風潮が起こった。

戯作者たちは世情に通じ、面白く読ませる文才があり、山東京伝のように下絵も描ける者も多く、絵師や版元とも親しい。依頼者からすれば費用はかかっても安心で、しかも有名人に頼むという優越感も得られた。引札師という仕事は収入の低い戯作者たちのアルバイトとしてはよかったのではないだろうか。

あらすじ

思案橋で出会った剣術師範の半兵衛と、用人方書役の六右衛門は、小藩の江戸藩邸に勤めていたが、今は隠居の身の上である。隠居後、引札師になろうと誓った半兵衛は、山東京伝に苦心の引札を見てもらおうと京伝店に向かう途中であった。何やら物言いたげな六右衛門をおいて、京伝店に着いた半兵衛は勢い込んで引札を見せるが・・・

佐江 衆一 (1834～)

浅草柿沼質店の次男として生まれる。1953年中央労働学院文芸科に入学。卒業後東宝ニューフェイスに応募するも落ち、1960年短編小説『背』が第7回新潮同人雑誌賞を受賞。芥川賞候補に5回なるが受賞を逃す。その後社会派作家として活躍、1982年国連反核会議に出席。痴呆症の老妻に自殺された老夫を描いた『老熟家族』が映画化されカンヌ映画祭で受賞。1990年頃から時代小説も書き始め、96年『江戸職人奇譚』は中山義秀文学賞受賞。杖術師範、剣道4段の腕前であり、今回の剣術師範が引札師をめざすという設定にみずからの経験が関わっていて興味深い。

【参考資料】角川書店「広告で見る江戸時代」、ブレーン別冊「引札繪びら錦絵広告」、角川選書「落語」―笑いの年輪― など